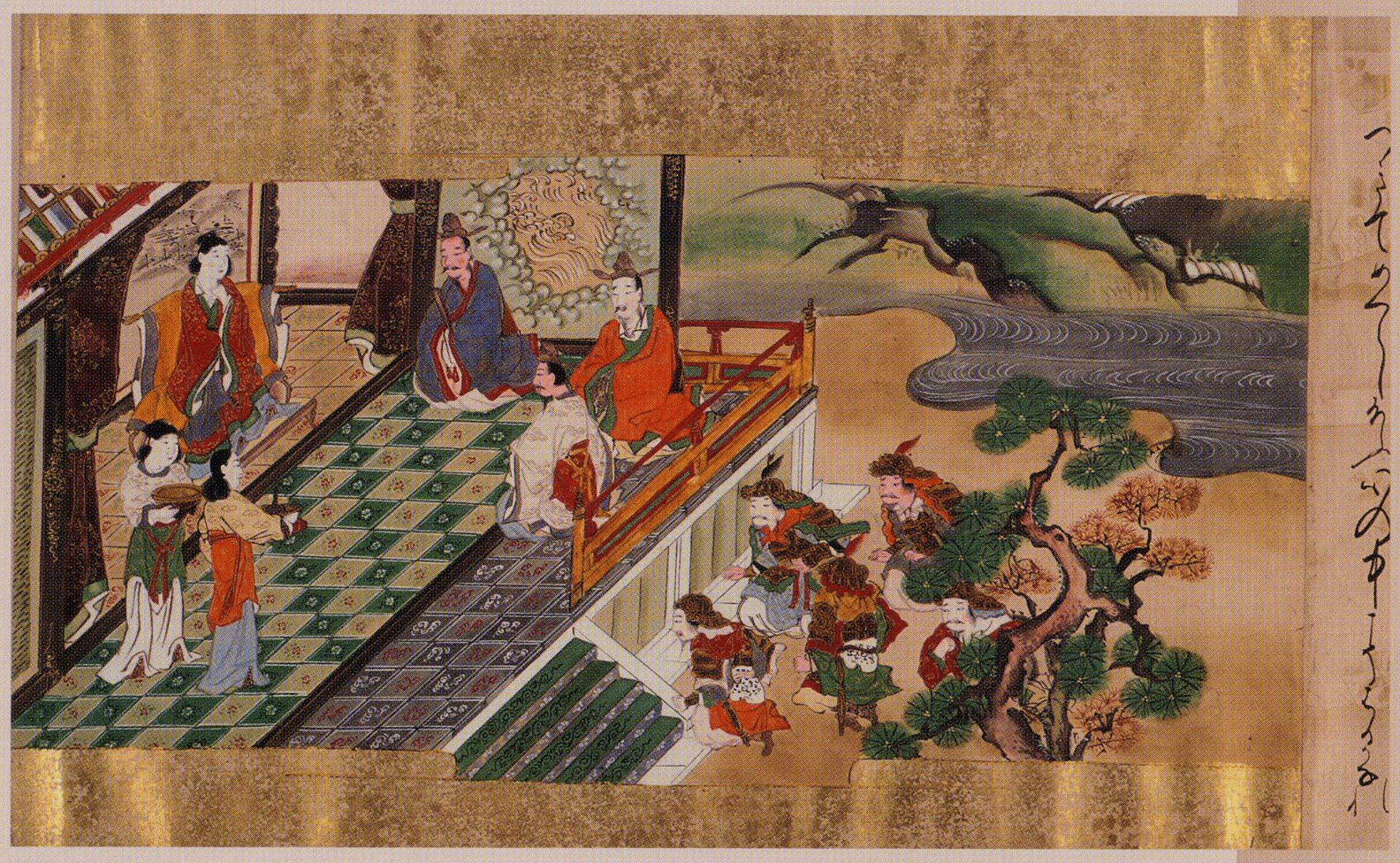
松 quarterly report

2009（平成21）年10月



『咸陽宮絵巻』

No. 74

二松学舎大学附属図書館 季報

目次　是非読んで欲しい一冊

◆2 『平安王朝』　雨海　博洋

◆3 中島敦の短編　橋本　栄治

◆4 『新自修英文典』　佐藤　進

◆5 『散るぞ悲しき
—硫黄島 総指揮官・栗林忠道』　五月女　肇志

◆6 『こころ』『紅楼夢』　伊藤　漱平
『若者のための政治マニュアル』　井上　裕司

◆7 大石久敬『地方凡例録』の利用法　大谷　光男

◆8 企画展

『平安王朝』（保立道久著　岩波書店）　〈是非読んで欲しい一冊〉

名誉教授　雨海　博洋

研究、学習途上にある皆さんに、入手しやすく学問のあり方に示唆に富む一冊として、岩波新書の保立道久著『平安王朝』をあげました。

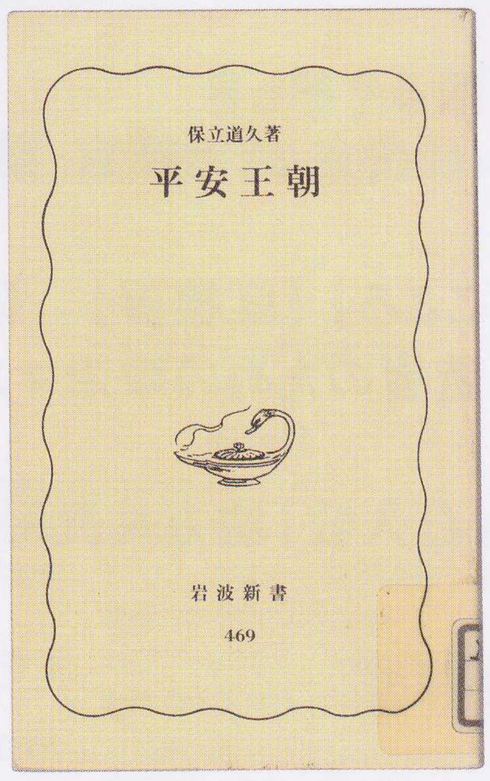
本書のねらいは平安京遷都の延暦13年（794）から、平家滅亡の元暦2年=文治1年（1185）に至る、桓武から安徳までの総数32人の天皇の生涯と運命を通して、平安時代の政治史をあたらしい視点から捉え直すところにある。それはたんなる平安時代王権の年代記ではない。大量に存在する歴史文献史料のほかに、『伊勢物語』『源氏物語』以下の文学史料に目配りを惜しんでいない。平安時代の文学は「王権の物語」の性格を強く持っており、歴史学の立場から政治史の中に位置づけることは、豊かな成果をもたらすとしている。

本書の全体を紹介することはできないので、＜Ⅲ「摂関政治」と王統分裂・一　円融・花山の角逐と兼家の台頭＞中の有名な花山出家をめぐるスキャンダルについて見てみよう。一般には花山出家の直接の引き金は妊娠していた為光娘弘微殿女御忯子（よしこ）の死を嘆くのあまりのこととされている。『栄花物語』で花山は忯子を愛する余り妊娠による里下りを許さず宮中に留めておいたが父藤原為光の哀願により一時は里下りの許しは出たものの、また悪阻（つわり）の中を呼び戻しての過度の愛着を持った花山自身の「あさましいものぐるほしい」姿に遠因があったとしている。本書では、さらに花山にとって、忯子の死去は、最適な身分の女性とのあいだで王位継承者を生み出すことに失敗したことを意味すると指摘している。忯子の父為光の姉妹は花山の母懐子の兄弟義懐の妻、義懐の妹は為光の室といった関係、もし忯子から子が生まれれば、花山の王統は為光と義懐という絶好の外護者のもとで展開したであろうと述べ、忯子の死は花山にとっては肉体的な挫折のみならず、ひとつの政治的挫折でもあったし、当時の花山の心境を表す和歌（寛和元年内裏歌会）

　　秋の夜の月に心のあくがれて雲居にものを思ふところかな

をあげている。

このような花山の背後に義懐らの台頭を警戒し、円融との関係を強めつつあった兼家が花山の出家を機に政権交代を意図したものであろうと述べている。その手先となって花山の出家を扇動したのが道長の兄道兼であった。『大鏡』にも道兼の行動について「日頃、よく契りて、すかしまうしたまひけむが恐ろしさよ」と述べている。小さい頃から花山の朋輩として育った道兼はその関係を武器としてともに出家をとの契りを結び、月明の夜内裏から山科の花山寺までお供したが寺についたとたん、父兼家に最後の挨拶をといって逃げ出した裏切り行為を花山は「我をば謀るなりけり」と、泣いて道兼を呪ったという。このようなスキャンダラスの話が花山出家譚の中心になっている。これに対して本書では前述の如く政治的新しい考察をしているがさらに、花山の執政期の特徴として無視できないのは仏教の影響であると説く。すでに花山新制の中に、殺生禁断令がひかれている。花山即位の翌年寛和元年（985）恵心僧都源信の『往生要集』の成立、その翌年に宋版一切経をたずさえ奝然（ちょうねん）の帰国という時期であり、浄土教の勃興は朝廷に大きな影響を与え、貴族社会の中で出家が大流行した。これが政治的にもきわめて甚大な影響を与えたことはあまり問題とされてこなかった。花山天皇がまさにこの雰囲気のなかで、寛和2年（986）6月、急に出家遁世した。『大鏡』にも「国王の位をすてたまへる出家の御功徳、かぎりなき御ことにこそおはしますらめ」と浄土教流行に即した話となり、同時に10世紀初め以来の政治史の流れを決着させるような大事件となったと説く。著者はこのようにこれまでの偏見ともいうべき強固な「常識」に杭して、あたらしい問題群に立ち入っているのである。



中島敦の短編

〈是非読んで欲しい一冊〉

名誉教授　橋本　栄治

今年は横浜開港150周年で、各種の催しが挙行されているが、その一つに横浜高等女学校（現横浜学園高等学校）で8年間、国語と英語を担当した中島敦（1909～1942）の生誕100年に当たるので、県立神奈川近代文学館で「中島敦展 ― ツシタラの夢」が開かれた（6／13～8／2）。「ツシタラ」というのは、教師を休職した中島敦が憧れていた南洋を取材して創作した「光と風と夢」の主人公スティヴンソンに付けられた、物語の語り手の呼称である。この展覧会の副題とされた。彼の南方指向を表わしたものである。南洋庁の国語編集書記として、パラオ島へ赴いたのである。年々症状の悪化する喘息によからんと望んだが、そうならず一年未満で帰国した。

この展覧会の関連として、本学の吉崎一衛教授の「中島敦の文学 ― 中国文学との関わりから」を記念講座があった。

中島敦の短編小説「山月記」「弟子」「李陸」「名人伝」等が高等学校教科書の定番になっているので、大方の人が読んでいる。私はそれらを読み返し、更に「文字禍」「牛人」を読み、今更のように魅せられた。魅せられたのは、その文章・文体 ― 殊に漢文調の硬質な、簡勁さである。

> 彼が中国古典、いわば漢文の世界にすなおにはいり、そこで遊んでいたように想像するのは、短絡にすぎるというものだろう。まず反撥があり、脱離があり、試行錯誤があり、遍歴があり、そして復帰があり、融合の努力があった。（氷上英広）

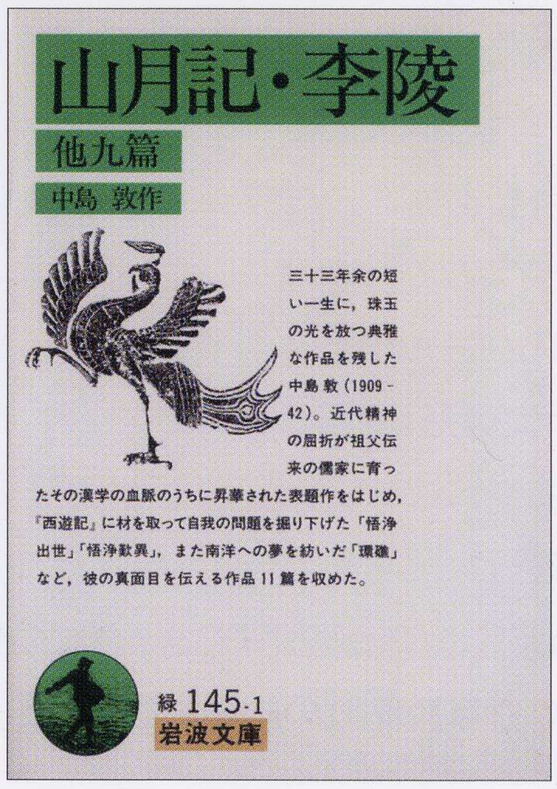
中島敦は明治42年、東京に生まれた。父田人（たびと）は中学の国語漢文の教師だった。敦が生まれると母（東京女子師範を卒業した才媛で、小学校の教師だった）は離縁となったので、敦は埼玉県久喜の祖父母のもとに引き取られた。この祖父は「撫山（ぶざん）」と号し、江戸末期の著名な亀田鵬斎（ぼうさい）の孫弟子に当たる学者であり、『性説疏義』・『日文草篆考』（写本）の著がある。鵬斎の郷里（群馬県邑楽郡富永村）の村長に請われて『亀田三先生伝実私記』を書いている。（三先生とは鵬斎とその子綾瀬（りょうらい）及び孫の鶯谷）

中島撫山には多くの子供があった。撫山の最初の妻紀（き）玖（く）との間に生まれたのが靖（綽軒）である。栃木で学塾明誼舎を開き、和漢の書を教授した。紀玖は安政の大地震で亡くなったので、撫山は亀田よしと再婚し、14人の男女を生んでいる。次男は端（斗南）。私立専門学校「明倫館」を開いた。その漢詩漢文は『斗南存稿』として刊行された。清末の碩儒羅振玉が序文を、竦（しょう）が跋を書いている。中島敦が「斗南先生」を書いている。三男竦（玉振）。久喜の言揚学舎主・玉振学舎主となり、のち北満州に渡っている。『蒙古通志』『書契洞源』5冊を著わした。撫山の遺著『亀田三先生伝実私記』の増訂をしている。四男翊（たすく）。プロテスタントの牧師となった。関姓。五男開蔵。工学博士。山本姓。六男田人。この人が敦の父である。七男比多吉（ひたき）。清国保定府の警務学堂に招聘され、のち満州国顧問官になった。

中島家には夥しい漢籍が蔵されていて、好学の気風が漲る家であった。敦は漢学を志した人ではない。にもかかわらず生まれながらに漢文の素養を身につけていた。そして父や兄達の漢文に囲まれて育った。「山月記」「弟子」「名人伝」「李陵」など、皆中国古典に題材を採ったものである。更に彼の西洋志向の一端を表わしたものに、歌稿「和歌（うた）でない歌」がある。その中に幾つかの「遍歴」と題する一連のものがある。「あるときは……」に始まるそのうたには、東西の思想家・文学者・芸術家 ― ゴッホ・フロイド・ゲーテ・カント・モーツアルト・大雅の名もある。一首ずつその要領をつかんでいる直感力は並のものではない。

漢文とはモダンな、というよりモダンに扱える学問でもある、と私は思っている。

おすすめ ― 岩波文庫『山月記・李陵他九篇』氷上英広氏の「解説」がよい。

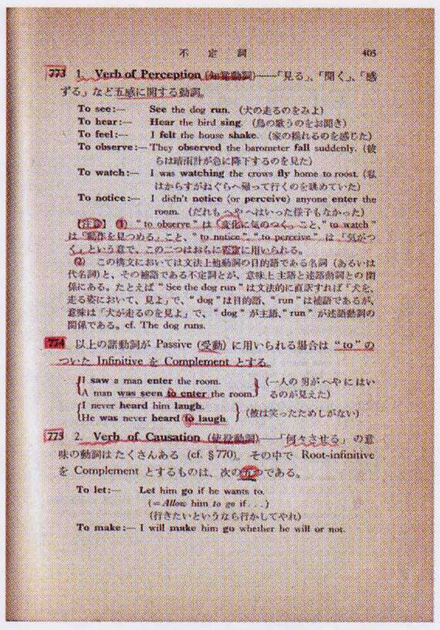


『新自修英文典』（山崎貞著　研究社）　〈是非読んで欲しい一冊〉

文学研究科
中国学専攻 教授　佐藤　進

現在、私の蔵書量は本棚にして約百本、自宅と大学研究室と書庫兼仕事場のアパートと、三ケ所に分けて置いてある。その中から「想い出の一冊」を選ぶのは無理な相談である。しかし、たまたま今年の春に懐かしい一冊が復刊されたのを手に取ると、そう言えば私の想い出の一冊はこの本だったなと気がついた。

左が愛読した蔵書で、ページがすっかり酸化して赤茶けている。右が復刊されたものの表紙である。



不　定　詞　405

773 1. Verb of Perception (知覚動詞)——「見る」、「聞く」、「感ずる」など五感に関する動詞。

To see:— See the dog run. (犬の走るのをみよ)
To hear:— Hear the bird sing. (鳥の歌うのをお聞き)
To feel:— I felt the house shake. (家の揺れるのを感じた)
To observe:— They observed the barometer fall suddenly. (彼らは晴雨計が急に降下するのを見た)
To watch:— I was watching the crows fly home to roost. (私はからすがねぐらへ帰って行くのを眺めていた)
To notice:— I didn't notice (or perceive) anyone enter the room. (だれもへやへはいった様子もなかった)

(注意) (1) "to observe" は「変化に気のつく」こと、"to watch" は「動作を見つめる」こと、"to notice"、"to perceive" は「気がつく」という意で、この二つはおもに感覚に用いられる。

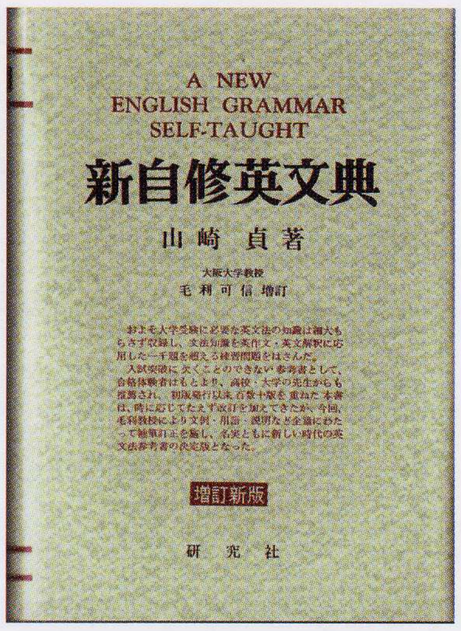
(2) この構文においては文法上他動詞の目的語である名詞（あるいは代名詞）と、その補語である不定詞とが、意味上主語と述語動詞との関係にある。たとえば "See the dog run" は文法的に直訳すれば「犬を、走る姿において、見よ」で、"dog" は目的語、"run" は補語であるが、意味は「犬が走るのを見よ」で、"dog" が主語、"run" が述語動詞の関係である。cf. The dog runs.

774 以上の諸動詞が Passive (受動) に用いられる場合は "to" のついた Infinitive を Complement とする。

I saw a man enter the room. / A man was seen to enter the room. (一人の男がへやにはいるのが見えた)
I never heard him laugh. / He was never heard to laugh. (彼は笑ったためしがない)

773 2. Verb of Causation (使役動詞)——「何々させる」の意味の動詞はたくさんある (cf. §770)。その中で Root-infinitive を Complement とするものは、次の三つである。

To let:— Let him go if he wants to.
(= Allow him to go if...)
(行きたいというなら行かしてやれ)
To make:— I will make him go whether he will or not.



A NEW
ENGLISH GRAMMAR
SELF-TAUGHT

新自修英文典

山崎　貞著

大阪大学教授
毛利可信 増訂

おおも大学受験に必要な英文法の知識は漏れもらさず収録し、文面加筆を英作文・英文解釈に応用した一千題を超える練習問題をはさんだ。
入試受験に欠くことのできない参考書として、合格体験者はもとより、高校・大学の先生からも推薦され、初版発行以来百数十版を重ねた本書は、時に応じてたえず改訂を加えてきたが、今回、毛利教授により文例・用語・説明など全篇にわたって補訂正を施し、名実ともに新しい時代の英文法参考書の決定版となった。

増訂新版

研　究　社

ふだん書物にはほとんど書き込みをしない私だが、この本は朱線だらけである。何となれば、これは大学入試の受験参考書だからなのだ。ひとが生涯においてもっともベタに精読する本は、ひょっとしたら受験参考書なのではあるまいか。

いまここに掲げたのは山崎貞著・毛利可信増訂『新自修英文典』（研究社、昭和38年6月増訂第2版）である。山貞（ヤマテイ）の英文典として親しまれた本書は、初版が大正10年（1921）であるから、今度の復刊で何と90年のロングセラーになるのだ。

本書は索引も入れて総587ページ、全9章の堂々たる文法書であって、これとは別に長文解釈用の『新々英文解釈研究』というのもあった（これも今年復刊された）。

『新自修英文典』は受験参考書とはいえ、ひたすらに英語の文法構造や用法を解説して、正誤問題や穴埋め問題や作文問題を適宜に用意しているだけである。受験参考書によくある過去問の出題校などはまったく表示しない。

北海道の小さな炭鉱町の本屋にこれがあったのは、奥付にあるように、昭和38年6月に増訂第2版が出た直後の配本であったからだろう。一方、私はこの年に高校に入学していて、受験雑誌『蛍雪時代』誌上でしばしば『新自修英文典』の名を眼にしていた。いま改めて気がついたが、偶然の出会いに近いものがあったことになる。

この文法書は受験が終わったあともしばしば参照することがあり、今でも文典好きの自分を満足させてくれ、ページがすっかり赤茶けても棄てずに置いてあった。今度、その昭和38年版がそのままの紙型を用いて復刊されたので、再読用に買い求めたのが上に掲げた表紙の画像である。

ところで、著者の山崎貞についてはあまり知られないが、序文によれば「正則英語学校に学び、同校に教え、同校の教授法を信ずるものである…」とあるので、斎藤秀三郎が開いた正則英語学校ゆかりの編者であることが分かる。

斎藤秀三郎といえば、高校三年生の春に二人の姉が買ってくれた齋藤秀三郎著・豊田實増補『熟語本位　英和中辭典』（岩波書店、1964年第21刷）を忘れることはできない。旧字・旧仮名の紙面造りで、解説を読むには難渋したが、たとえば"laugh"の項にある例文、「Laugh and grow fat.笑ふ門には福來る」だの、「Love laughs at distance.惚れて通へば千里も一里」だのに見られる編者苦心の訳文には魅了された。

その味のある訳文が読みたくて引きまくり、それでずいぶん漢字の旧字体を覚えたものである。大きな声では言えないが、中国古典学徒として生きる基礎を習得したのは斎藤の『英和中辭典』だったのである。

これも初版は大正4年（1915）の古いものだが、今でも新刊で買うことができる。もうじき95年の超ロングセラーだ。豊富な前置詞の解説などには比類がない。

試験によく出る公式的な文型の暗記方式になじまなかったお陰で、大正生まれの本格的な参考書にめぐりあった。いま、年に数冊の英語のミステリ小説を楽しむことができるのは、正則英語学校ゆかりの辞書と文典の賜物だ。

私はあと三年半で定年退職の予定だが、退職後にまず通読を楽しむのは『新自修英文典』と決めてある。

『散るぞ悲しき―硫黄(いおう)島 総指揮官・栗林忠道』（梯久美子著　新潮社）　〈是非読んで欲しい一冊〉

文学部
国文学科 専任講師　五月女　肇志

太平洋戦争末期の昭和二十年（一九四五）二月十九日から三月二十六日まで小笠原諸島の南端の硫黄島で、日米の熾烈な戦いがあり、多くの兵士達が命を落とした。この戦争においてアメリカ軍が日本軍に対し反撃に転じて以降、アメリカ側の死傷者数が日本軍を上回った唯一の戦場として知られている。その時に日本軍の指揮を執った人物が陸軍中将であった栗林忠道である。近年映画「硫黄島からの手紙」で渡辺謙が演じたので、それで知ったという人がいるかも知れない。平成十八年（二〇〇六）に第三十七回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した単行本を文庫化している。

書名の由来は、栗林が最期に戦争を指揮していた大本営に対して打った訣別電報の中に「国の為重きつとめを果たし得で矢弾(やだま)　尽き果て散るぞ悲しき」という辞世の歌が見えることによる。この歌の第五句は大本営により、「散るぞ口惜し」と改変され、新聞に掲載された。

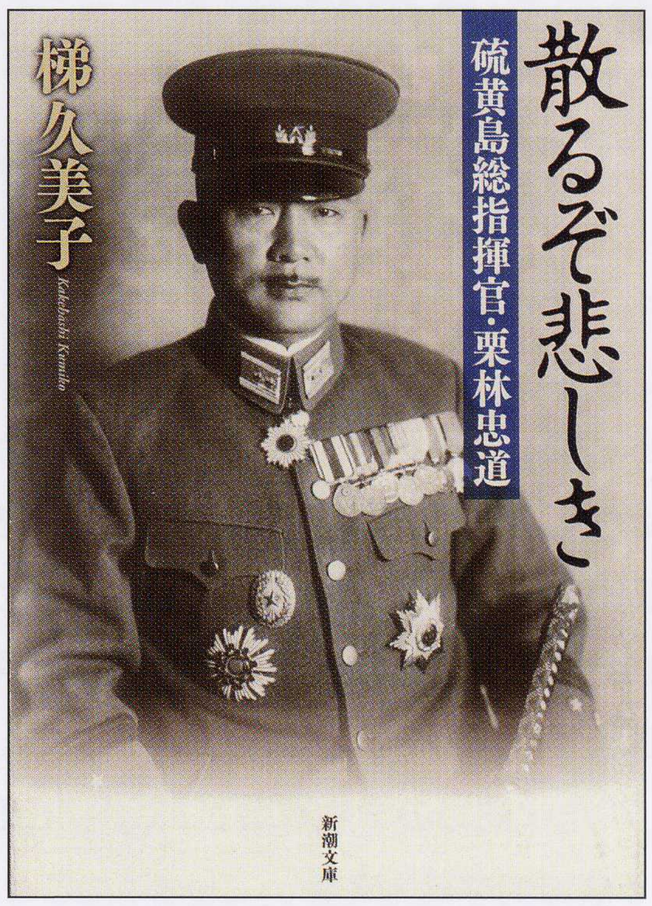
歌の表現を文芸的な見地からより良いものへと改変することは、古くから行われていて、私の研究のテーマでもあるが、ここではただ国民の戦意喪失を恐れての措置といえるだろう。この改変から、現場に身を置いている人間と、自らは安全な場所にいて実態と乖離した指導を続けている人間との意識の相違が見て取れるのだが、そのことで具体的にどのような弊害が生じていたか、本書を一読すると理解できると思う。

この書では、栗林が妻や子供達に宛てた一通一通の手紙を丁寧に読み解くことで、彼の合理的精神を浮き彫りにし、それが硫黄島における作戦に反映していることを示している。例えば彼は家族にあてた手紙の中で、家のすきま風を気にして図まで書いた上で細かい指示を出している。このような彼の一面は、一人一人の兵隊に対し、「我々は～せん」とする「敢闘の誓」を配布し、丁寧に戦い方を指導した点とつながっているのである。戦場をしっかりと観察し、これまで日本軍がとってきた戦法にこだわらず、地下壕を利用して敵軍を迎え撃つ戦術をとった。この戦術を実行できない将校はあえて入れ替えている。戦果の報告も、楽観的な数字を挙げることなく、冷静な分析に終始している。目的及びその実現のための方法をメンバーに徹底すること、現場をしっかりと見て最適のやり方を貫くことは、現代におけるリーダーも見習うべきことだろう。

念のためいっておくが、決して戦争賛美の書ではない。現在でも自衛隊の基地として使われている硫黄島は、日本本土を空襲する上で爆撃機の発着に適した場所であった。ここがアメリカ軍の手に落ちることは、より多くの一般市民が空襲で命の危険にさらされることにつながる。水・食料も十分に得られない絶海の孤島で、日本軍の兵士達が圧倒的な火器を有するアメリカ軍に対して必死に戦ったのは、それを防ぐためであった。アメリカ留学の経験があり、当地の人々と積極的に交流し、その国力を知り尽くしていた栗林の考えでは、アメリカは戦うべき国ではなかったのである。

そもそもこの無謀な戦争を始めたのは彼我の国力も顧みず、楽観的な見通しで動いた軍中央の要職にいた大本営の指揮官達であり、筆者の批判もそこへ向いている。栗林の戦術を貫くための物資補給や制度変更の要望に対し、彼らは十分な支援をしなかった。これまでの戦争での経験を生かさず、筆者の言葉を借りれば、その場の弥縫策に終始したのである。そして栗林が望んだ戦争終結のための努力も十分に成されず、以後ますます国民の犠牲が広がったことも周知の通りである。

現場の実態を知らない者が上に立った組織は衰え滅んでいくしかないということを強く感じさせられた一冊であった。



『こころ』『紅楼夢』

〈思い出の一冊〉
〈是非読んで欲しい一冊〉

名誉教授　伊藤　漱平

〈思い出の一冊〉「こころ」夏目漱石

夏目漱石は縁があり、ここ二松学舎で漢学を学んだ。漱石は「こころ」で、エゴイズムと友情の葛藤に深くメスを入れた。時代は明治から大正にかけて、乃木大将の殉死への特別な思いが描かれている。私が学生時代に読んで、深く感銘を受けた作品である。

〈是非読んで欲しい一冊〉「紅楼夢」曹　雪芹

2008年5月31日（土）に東海大学文学部文芸創作学科主催のシンポジウムが開催された。学生の読書量が危ぶまれるところで、非常に的を得た企画である。ここで大学生がよむ50冊に中国から「紅楼夢」（曹　雪芹）が選ばれた。手前味噌で恐縮だが私が60年に亘り、取り憑かれた逸品である。読書の秋にぜひお薦めしたい。

シンポジウムの要となった芥川受賞作家の辻原登教授の作品「村の名前」、「ジャスミン」は中国の今がリアルに表現されており、ミステリーとロマンスの合わせ技が楽しい作品である。

参考までに厳選された50冊をご紹介する。

公開シンポジウムで選択された大学生がよむ50冊（毎日新聞社後援／紀伊国屋書店協賛）

日本編		
古典	万葉集	
	源氏物語	紫式部
	平家物語	
	徒然草	吉田兼好
	おくのほそ道	松尾芭蕉
	歎異抄	唯円／親鸞
	心中天網島	近松門左衛門
近現代	山椒大夫・高瀬舟	森鴎外
	我が輩は猫である	夏目漱石
	たけくらべ	樋口一葉
	武蔵野	国木田独歩
	金色夜叉	尾崎紅葉
	瘋癲老人日記	谷崎潤一郎
	病床六尺	正岡子規
	きりぎりす	太宰　治
	墜落論	坂口安吾
	遠野物語	柳田國男
古典	様々なる意匠	小林秀雄
	豊饒の海	三島由紀夫
	富士日記	武田百合子
	第七官界彷徨	尾崎　翠
	春宵十話	岡　潔
	いきの構造	九鬼周造

海外編		
中国	紅楼夢	曹　雪芹
アジア	千夜一夜物語	
ギリシャ	イリアス	ホメロス
聖書	聖書（旧約＋新約）	
英米	ハムレット	シェークスピア
	嵐ヶ丘	エミリー・ブロンテ
	インドへの道	E.M.フォースター
	フィネガンズ・ウェイク	ジョイス
	ナイン・ストーリーズ	サリンジャー
	タイタンの妖女	カート・ヴォネガット
フランス	幸福論	アラン
	危険な関係	ラクロ
	感情教育	フローベール
	赤と黒	スタンダール
	夜の果ての旅	セリーヌ
	失われた時を求めて	プルースト
ドイツ	ファウスト	ゲーテ
	資本論	マルクス
	ブッデンブローク家の人々	トーマス・マン
その他	精神分析入門	フロイト
	変身	カフカ
	ドン・キホーテ	セルバンテス
	ゴッホの手紙	
	魅せられた旅人	レスコフ
	白痴	ドストエフスキー
ロシア	カラマーゾフの兄弟	ドストエフスキー
	戦争と平和	トルストイ

『若者のための政治マニュアル』（山口二郎著　講談社）

〈是非読んで欲しい一冊〉

国際政治経済学部
国際政治経済学科 専任講師　井上　裕司

今回紹介する本は『若者のための政治マニュアル』という本です。大学で政治学や国際政治学を教えていると、学生の政治への関心の無さを残念に思うときが多いです。「政治学」ではなく、現実の「政治」への関心です。といっても、これは「最近の若者は」的なことを言いたいわけではありません。90年代に大学生だった私の世代だって同じですし、おそらく80年代の私より上の世代の学生も同じだったのでしょう。70年代初めの学生運動が「あさま山荘事件」に代表される破滅的な結果を導いてしまったことから、日本では若者が政治に関心を持つことは「悪」であるという風潮ができあがりました。それが若者の政治的無関心の原因のひとつだと思います。

もうひとつは、日本が経済成長を遂げ、先進国になり、明確な政治的対立軸を設定しづらくなったことが原因だと思います。みんなが豊かになり、政治に何の要求をしなくても、おもしろおかしく暮らしていけるなら、それでいいじゃないかということです。特に不満もなく、他に政治よりもおもしろいことが山ほどあるわけですから、関心の持ちよう

がありません。政治に関わっても得なことなんてない時代の到来です。

いったんそうなってしまうと、なかなか元のように若者が政治に関心をもつのは難しくなります。政治に対するそもそもの知識が不足しており、それを学ぶとどんな得なことがあるのかというイメージもわきにくいようで、なかなか興味を持ってもらえません。それは、例えば選挙の投票率にもあらわれており、どの種類の選挙でも若者の投票率は中高年のそれより低い状況にあります。

ただ、今の時代は、以前のような政治に関わっても得なことなんてない時代のままなのでしょうか。おそらくバブル期が終わった頃に、時代の転換があったように思います。戦後日本の抱えてきた歪みが限界点に達したのか、世界的な構造変動があったのか、はっきりとはわかりませんが。とにかく、時代は変わりました。しかも、例えば私の教え子たちの厳しい就職活動の状況を見るだけでも、今の若者がその時代の変化のワリを食わされているような気がしてなりません。

そんな自分の努力だけではどうしようもないときに助けになるのが政治の役割のひとつのはずです。ただし、政治家は若者のほうをなかなか見てくれません。政治学的には常識なのですが、合理的な政治家は国民全体のためには動きません。政治家にとって最大の関心事は、次の選挙で勝つことです。つまり、選挙にいく人たちの利益を優先します。政治に無関心の若者のために動いても、政治家にとってはメリットがないのです。

さて、冒頭で紹介した本ですが、政治について知る第一歩としてお薦めです。ここには、政治に関心を持つことがいかに得なことなのかが書いてあります。政治家を若者に振り向かせましょう。それが就職活動で内定をもらうのと同じくらい重要なことだとわかるはずです。

大石久敬『地方凡例録』の利用法

〈是非読んで欲しい一冊〉

名誉教授　大谷　光男

大石久敬（ひさたか）は江戸時代の中後期の農政学者であった。享保10年（1725）に九州は久留米藩（現・福岡県）の久留米で生まれ、藩内の大庄屋大石家の養子となり、義父の後を継いだが、宝暦4年（1754）に久留米藩の百姓一揆の難を逃れて、肥後やその他を経て大坂に現われ、清閑寺大納言秀定の青侍となったという。その後も諸国を転々として、姓を高井姓に改めるなどして、高崎藩（群馬県主松平右京大夫輝高）に、天明3年（1783）に招し抱えられている。農政の研究で就（つ）いたのであろうか。馬廻格で、禄は百石金十七両、同8年には郡奉行に昇進、寛政3年（1791）から、『地方凡例録』の著述に従事し、同6年8月に全16巻予定のうち11巻分を藩主に献上した。未完とはいえ、主要な事項は網羅されており、今日においても江戸時代の地方研究の必読書として推薦されている。また日本は農業を基盤とした国家であるので、近世史に限らず、精読することを推薦したい。

久敬の履歴については大石慎三郎、佐藤常雄両氏の調査を要約した。佐藤氏によると、大石の伝記は判然としないが、通説では享保年間に高崎藩士の家に生まれたと伝えるという。私は佐藤氏の説が正しいと思う。江戸時代は無職の者が勝手に移動することは、かなりむずかしかったはずと考えられる。『地方凡例録』の研究の上からも、大石の履歴は改めて調査の要がある。

久敬が久留米藩の、しかも大庄屋の出身であれば、私共が只今、調査している「抱田地」について、明確な判断が下されているはずである。その問題の史料を掲げると、「漢奴国王」金印の出土地として知られる福岡市東区志賀島の百姓甚兵衛の金印発堀口上書（天明4年＜1784＞）の一行目に、「私抱田地、叶の崎と申所」とあって、博多湾に面した「叶の崎」から本百姓甚兵衛によって金印が掘出されたことになっているが、志賀島村の史料からは秀治が掘出す、とある。また博多で有名な聖福寺の仙厓が晩年、金印の発見から40年以上を経た後に隣村の勝馬村に行き、金印は秀治・喜平が掘出と掛幅に書いており、肝心な甚兵衛の名は両村の寺院の過去帳にもみえない。今は寛政2年（1790）の志賀島村田畠名寄帳の上冊の発見を俟たざるを得ないのである。

ところで『地方凡例録』には、「出作・入作・持添之事」の条に「右の名目（みょうもく）の外に抱田地・抱屋敷などの名目ありて、之は其村の百姓にてハあらずして外（ほか）より其村の田地・屋敷

を所持するを云」とある。この一文は、小宮山昌世が享保年間、代官を解任された後か、『地方答問書』（田園類説）に「抱田地、抱屋敷の名目有、其百姓にあらずして、外より所持するをいふ」とあり、久敬の説は昌世の説を踏襲したに過ぎない。また『増補田園類説』には久敬も加筆したが要領を得ていない。

今日、抱屋敷については、明治大学の門前博之教授が「茨城県潮来（いたこ）市旧牛堀村須田本家文書の研究」（明治大学人文科学研究所紀要　第59冊　2005年3月刊）で、幕末期の「抱屋敷は村内上層が多く所持すること、また、他村の所持者も存在することなどから、抱屋敷とは買得あるいは抵当として集積された屋敷なのではないか、と推測される」と、結んでいる。

抱屋敷を所有する者は村内の上層部で、他村の所有者も存在する」という。昌世・久敬の抱屋敷の定義は「其村の百姓にてハあらずして外より其村の屋敷を所持するを云」とあって、現実とは相違している。しかし都市部の農村であろうか、寛延2年（1749）に幕府は屋敷譲に関する触書を出し、武士（大名）・町人・百姓・寺社・家来の抱屋敷を対象としているので、抱屋敷の解釈が拡大していることがわかる。しかし、抱田地の史料は九州地方で、九州大学・津屋崎町・福間町などが蒐集しているが、まだ論考は発表されていない。志賀島の甚兵衛の口上書にある「抱田地」についても暫くお預け（保留）の状態である。

〔参考資料〕

小宮山昌世　山内薫正校訂『増補田園類説』日本経済叢書　巻八。『続々群書類従』法制部。
大石久敬『地方凡例録』日本史料叢書（近藤出版社刊）。

（注）
小宮山昌世　安永2年（1773）没。
大石久敬　寛政6年（1794）没。

企画展

今月は、九段・柏両校舎で次のような企画展及び講演会（柏校舎）が開催されています。

【九段校舎／大学資料展示室】

○10月企画展「書簡あれこれ」

期間;10月1日（木）～24日（土）

時間;10時～16時

閉館;日曜・祝日

○11月企画展は
「近代辞書の世界
—諸外国との窓—」を
予定しています。

【柏校舎／図書館】

○企画展「和本への誘い」

期間;10月19日（月）～31日（土）

時間;9時15分～18時55分（但し、24日・31日は16時）

閉館;日曜・祝日

○講演会;10月31日（土）13時

講師;本学文学部教授 山崎正伸氏

演題;平安朝の恋歌

定員;100名　入場無料

表紙資料解説

『咸陽宮絵巻（奈良絵本）』

秦の始皇帝の咸陽宮で、燕の荊軻（けいか）と秦舞陽（しんぷよう）の二人が拝謁する機をとらえて、始皇帝暗殺を企てるが、始皇帝の后、花陽婦人の機転により暗殺は失敗し燕も滅ぼされる。という説話を基にしている。
寛文頃（1660年代）写。伝本は少なく、現在まで判明しているのは6点。

二松学舎大学附属図書館
季　報
第74号
発行日　平成21（2009）年10月10日
発　行　二松学舎大学附属図書館
九段校舎図書館　〒102−8336　東京都千代田区三番町6-16
電話:03-3263-6364
柏校舎図書館　〒277−8585　千葉県柏市大井2590
電話:04-7191-8758
印刷所　株式会社 サンセイ
電話:03-5614-2515